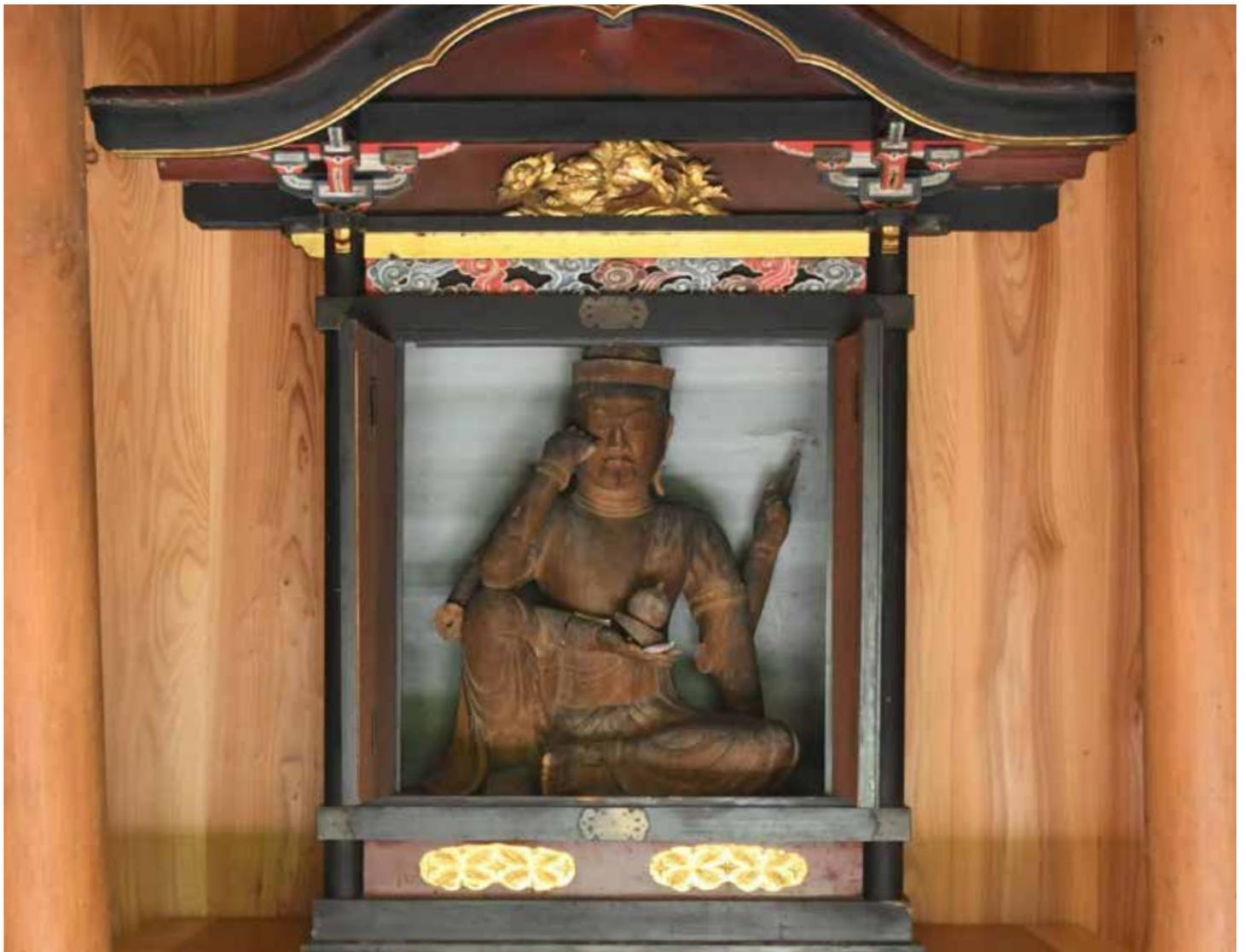


上原 美術館 通信

No.
19

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2022年9月28日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



仏像ブーム、国宝ブームと言われて十数年。仏像や刀剣、近世絵画を紹介する特別展や、近代日本画家の回顧展に長蛇の列ができ、美術誌がこぞって特集を組むなど、日本美術に対する人気は現在も堅調で、一過性のブームを超えて、しっかりとしたファン層が生まれた感があります。その際、これらの展覧会のチラシやポスターには、国宝や重要文化財の出展数を誇るキャッチコピーが踊り、文化財指定を受けた名品に、多くの方たちの関心が集中している状況がうかがえます。

ところで現在、文化財指定を受けている多くの仏像や作品は、過去の調査によって見出され、優れた研究者によって緻密な研究がなされ、その成果が公開されることで、その価値が広く社会的に認知され、公的な指定を受けるに至ったものです。実は今日でも、全国各地に、研究者にさえその存在を知られないまま伝えられている貴重な文化財があり、調査研究と評価を待っています。文化財には未だ広大な裾野、フロンティアが存在し、文化財指定は現在進行形なのです。

その一方で、特に仏像や神像などの宗教遺物の分野では、信仰上の問題や、防犯上の懸念、モノとしての文化財保護の考え方と、祭礼など宗教行事でこれらの文化財が果たす役割の間にある矛盾、所蔵者の事情など、多種多様で複雑な理由から、文化財としての価値を承知しながらも、所蔵者が指定を望まないケースも多いのが現状です。これらの文化財に対しても、障害を解決して指定につなげてゆく努力が必要ですが、このように指定を受けないものの中にも、貴重な文化財が存在します。これからの文化財保護はこの視点も踏まえて行われる必要があると思われまます。

上原美術館は開館以来39年に渡り、継続して伊豆を中心に静岡県内各地の仏教美術調査を行い、貴重な仏像神像が多数存在することを明らかにしてきました。本展はこの成果を踏まえ、公的な文化財指定を受けていない仏像神像の中から、約20点を厳選して展示します。本展は、静岡県の仏教文化の豊かさ、素晴らしさを多くの方々に知っていただくとともに、文化財保護意識のさらなる啓蒙と発展を願って開催するものです。

静岡県東部、富士山麓の裾野市からは、6体の仏像神像が出展されます。裾野市公文名の光明寺は、永禄年間(1558～70年)に明綱英晨が中興した曹洞宗の禅刹ですが、『駿河志料』(1861年成立)によると、往時は七堂伽藍を備えた真言宗の寺院だったといひます。この寺に伝わるのが平安後期の毘



写真① 毘沙門天像 (平安時代) 裾野市・光明寺

沙門天像と、不動明王像で、本展にはこのうちの毘沙門天像が出展されます(写真①)。またこの寺には室町後期～近世前期に制作された、等身大を超える大きさの大日如来像と伝阿弥陀如来像も伝えられており、この二像も本展にご出展いただいています。

光明寺から直線距離で南におよそ1.1km。茶畑地区の茶畑浅間神社からは、平安後期の神像と二体の隨身像を展示します。四面神像(写真②)は像高24cm。小さなお像ながら、正面と左右、背面に、女神あるいは童子形の面を配する異形の神像です。山梨県の江原浅間神社には三体の女神像を背中合わせに彫出、さらに三像の女神像の背面から中央に突出するように如来の胸像をあらわす神像が伝えられており、茶畑像とともに富士山信仰に関わる可能性が高い像です。茶畑浅間神社の四面神像、二体の隨身像は通常非公開で



写真② 四面神像 (平安時代) 裾野市・茶畑浅間神社



写真④ 僧形像 (平安時代) 伊豆の国市・宗徳寺

すが、今回、お守りしている地域の方々の特別なご厚意により、展示が実現しました。

伊豆の北端の三島市。安久地区の長福寺からは、十一面観音像(写真③)、如来像が出展されます。いずれも平安時代の等身大の立像で、二像よりもやや大型の薬師如来立像の脇侍として、現在に伝えられました。同じ伊豆北部、伊豆長岡地区の宗徳寺からは、平安時代のものと思われる五体の木彫像を展示いたします。このうち二体の神王像は、二天像、あるいは四天王の二体と考えられ、等身大の一木造りの像です。また二体の僧形像のうちの一像(写真④)は像高61cm。右額と右腕に大きな節がある材を用いており、神木などの霊木を用いた像の可能性がります。長福寺像は地元で活動されているみしまのお寺めぐりの会、宗徳寺像は伊豆の国市教育委員会の依頼によって行った当館の調査で、それ



写真③ 十一面観音像 (平安時代) 三島市・長福寺



写真⑤ 吉祥天像 (平安時代) 河津町・地福院



写真⑥ 観音菩薩坐像 (鎌倉時代) 河津町・林際寺

ぞれ一昨年と昨年に見出されたばかりの像。本展が初公開です。これらの像の造像事情や来歴については現状では全く分かっておらず、今後の研究課題です。

その他本展には、下田市北の沢、法雲寺観音堂の秘仏、如意輪観音像(表紙写真)、河津町縄地地区、地福院の吉祥天像(写真⑤)、同町沢田地区、林際寺の観音菩薩立像(以上平安時代)、観音菩薩坐像(鎌倉時代、写真⑥)など、文化財指定こそ受けていないものの、貴重な仏像神像が集まります。この機会に是非ご覧ください。(田島)

※公的な指定を受けていない文化財の呼称としては、未指定文化財の語が一般的に用いられていますが、本展では現時点で文化財指定を望まれない所蔵者のお考えに配慮し、未指定ではなく、「無指定文化財」の語を用いております。



アンドレ・ドラン《婦人像》1934-39年頃

うっすらとした影の中からこちらを見つめるドラン《婦人像》。そのまなざしは、見るものに何かを語りかけるかのようです。絵の中のまなざしを辿ってみると、そこには時や場所を越えて、描かれた人との交流が生まれます。本展では画家やモデルのまなざしに注目して、絵画の中に広がる不思議な空間へと入っていきます。

絵画には、画家自身のまなざしも隠されています。マティス《鏡の前に立つ白いガウンを着た裸婦》は、南仏ニースのアトリエでポーズをとる女性が描かれています。室内に差し込む光は、ガウンの白に混ぜられた薄いエメラルドグリーンであらわされていますが、その色彩は画面左に立つ大きな鏡の中にまで広がります。よく見ると、その鏡の左端にはカンヴァスとイーゼルが映り込んでいます。これらは絵を描いている画家自身の姿を暗示しています。この絵を見ている私たちの眼は、マティスのまなざしと重なって、いつしか光と色彩が織りなす豊かな世界へいざなわれます。

一見、何の変哲もない静物画にも画



アンリ・マティス《鏡の前に立つ白いガウンを着た裸婦》1937年

家のまなざしを見ることができます。セザンヌ《ウルビノ壺のある静物》は印象派のバトロンであった医師ポール・ガシェの邸宅で描かれたものです。30代前半のセザンヌは、ガシェの家で先輩の画家ピサロから助言を受けながら絵を描き、暗い色調から明るい色面構成による絵画へ大胆に転換していきます。この静物画はまさにその時期に描かれた作品です。本作はよく見ると立体感をなくすかのようモティーフが真正面からとらえられた構図になっています。壁に浮かぶ壺の影と相まって、画面には浮遊感が漂います。セザンヌは別の油彩画で同じモティーフを斜め上からも描いていますが、その試



ポール・セザンヌ《ウルビノ壺のある静物》1872-73年

みは絵画における平面と立体の関係性を問い直すかのようです。

安井曾太郎《銀化せる鯛》も不思議な構図の作品です。戦後、湯河原に居を構えた安井は、お正月に熱海の人に大きな赤い鯛を貰ったといいます。当初は少し写生して食べるつもりでしたが、遅筆な安井が油彩で描き始めると、どんどん時が経っていきます。そしていつしか5月となり、鯛は腐って干物のようになってしまいました。しかし、安井はかえってそれに美を見出します。「干物になった鯛は亦美しかったです。色は銀色になり、はつきりした面がきれいにとれていて、すぐれた彫刻の様だつた。實にいい画材だと思つた。そして前の鯛圖を仕上げた後、皿もそのまま、上から見下ろしたところを描いた」(『改造』昭和29年1月号)。描き続けて5ヶ月、安井は「何だか可哀想の様な気がした」鯛を、家族とともに裏の空地へ埋葬しました。「ほんとに腐つても鯛は美しかったです。本作は安井による独特のまなざしを見ることができる作品です。

本展ではそのほか、新収蔵・初公開となる鍋木清方《みぞれ》もご紹介いたします(詳細は5ページコラム参照)。まなざしが導く豊かな絵画の世界をどうぞお楽しみください。(土森)



安井曾太郎《銀化せる鯛》1953年(昭和28年)

企画展『まなざしをみる』では、このたび新たに収蔵しました鍋木清方《みぞれ》を当館初公開します。

画中の若い女性は、背後からの強い風にあおられて、思わず顔をうつむいたのでしょうか。風になびいた着物を見ると、吹きつける風によって雨と雪が降っていることがわかります。そして、周囲には紅葉と銀杏の落葉が舞い上がります。

本作に描かれた女性は、樋口一葉「たけくらべ」に登場する美登利です。多く文学作品を題材に描いた清方が最も親しんだ小説は、「たけくらべ」でした。清方が文学青年だった二十歳に満たない頃は、この物語を朝夕読誦するほどであったといいます。本作では驚神社の西の市の場面を描いています。西の市は江戸時代から続く年中行事で、霜月(11月)の西の日に開運招福・商売繁盛を願う祭りです。11月に西の日が2回あれば二の西、3回あれば三の西といわれています。「たけくらべ」では、「此年三の西まで有りて中一日はつぶれしかど前後の上天気に大鳥神社の賑ひすさまじく」とあります。小説では「三の西」まで開かれていたようで、その2回目の西の市が悪天候であったことを清方は汲んで、この場面の天候を「みぞれ」としたのでしょう。雪好きであった清方らしい「みぞれ」という選択が、何とも心憎いばかりの演出です。さらに、美登利が身に付けているおかめが付いた熊手の簪と、手に持つ笹を通した頭の芋(八頭)は、いずれも西の市の縁起物です。

清方は、この作品で西の市から帰る美登利をただ描いただけではありません。挿絵画家であった清方らしく、物語を作品にしっかりと組み込んでいます。



鍋木清方《みぞれ》1948(昭和23)年、絹本彩色、軸装 © Akio Nemoto 2022 / JAA2200104

「たけくらべ」の西の市の場面は、それまで明るく勝気であった彼女が、急に元気がなくなってしまう物語終盤の要所です。しかし、作者の一葉は元気がなくなってしまった原因に触れていません。そのため、読者にさまざまな推測を呼び起こさせるシーンです。

大人の女性の象徴である島田に結び、美しく着飾った美登利は、うつむきかげんで少し不安げな表情を浮かべています。ぐずついた天候が少女を憂鬱な表情にしているのか、もしくは思春期の揺れ動く心情から曇っているのか、さまざまな憶測が頭に浮かんできます。「たけくらべ」の愛読者であり、挿絵画家であった清方ならではの繊細かつ的確な描写が冴えわたります。

この作品は、雑誌『苦楽』(1948[昭和23]年11月号)を飾った表紙原画です。『苦楽』は作家・大佛次郎(1897-1973年)が、戦後に復刻創刊した文芸雑誌であり、その表紙絵を清方が担当しました。清方は『苦楽』のために、毎号、季節にあわせた美人画を用意しています。まさに11月にぴったりの題材を愛読書の「たけくらべ」より選んで描いたのが本作《みぞれ》です。



雑誌『苦楽』1948(昭和23)年11月号 敗戦直後ではあったが、『苦楽』は著名な文豪と画家たちで作られた贅沢な雑誌であった。

戦争で東京の家を失い、鎌倉で再出発した頃に同地の文士である大佛から依頼された『苦楽』の仕事は、若い頃に挿絵画家であった清方にとって、戦後の新たな門出に相応しいと思えたようです。また、芸術を手にとって楽しんでもらいたいという清方の願望も叶えられる仕事でもあり、「私にとつてやりがひのある仕事は、大佛次郎さんから頼まれた文藝雑誌『苦楽』の表紙であった」(『続こしかたの記』)と語るほどでした。清方の表紙絵は人気を呼びますが、『苦楽』は出版不況のあおりを受けて経営が悪化し、惜しまれつつもわずか3年足らずで廃刊となってしまいました。短い期間でしたが、清方が手掛けた『苦楽』表紙絵は、清方にとって鎌倉時代の重要な仕事のひとつにあげられるでしょう。

本作《みぞれ》は大佛が旧蔵した作品です。戦後『苦楽』を創刊した際、表紙絵を頼むならば清方しかいないというほど、その作品に惚れ込んだ大佛。かつては大佛も本作を愛でていたであろうことを考えると、感慨深いものです。ぜひ皆様もお近くで鍋木清方《みぞれ》をご鑑賞ください。

学芸員によるギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会内容について、学芸員が解説を行いました。会期中は多くのお客様にご参加いただきました。

なおギャラリートークは展覧会会期中、以下の内容で開催しております。

日時：会期中の毎月第3土曜日 10：00～(近代館のみ) / 11：00～(仏教館のみ)

会場：上原美術館・展示室

参加方法：先着順 ※要入館券

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、やむを得ず中止になる場合がございます。詳細は当館ホームページ、公式SNS等をご覧ください。



出張ワークショップ「はじめての日本画」

伊豆の国市野外活動センター「茅野っこひろば」 7月29日

毎年恒例となった伊豆の国市子ども教室「あいキッズ」の日本画の出張ワークショップも今年で10年目となりました。今回のワークショップでは、小・中学生12名が参加し、日本画の画材(岩絵具や胡粉など)を使った色紙の制作に挑戦しました。初めて日本画の制作を体験した参加者は、思うような色が出ないと苦戦しながらも、楽しく制作活動を行っていました。



ワークショップ「親子で色あそび、透明水彩で」

当館アトリエ 8月2日、3日

夏休みのイベントとして、ワークショップ「親子で色あそび、透明水彩で」を2年ぶりに開催しました。60名以上のご応募の中から抽選で選ばれた各日4組の親子、合計20人にご参加いただきました。講師の小野憲一先生とともに、赤・青・黄の3色の透明水彩絵具を使い、グラデーションをつくることから色あそびをスタート。その後、混色したり水分量を変化させたりして、思い思いに多彩な色の変化を楽しみました。各テーブルに用意された画用紙は、あっという間にたくさんの色彩であふれていきました。最後には、大きな画用紙に親子で協力して絵筆を動かし、一枚の作品を制作。各組が世界で一枚だけの素敵な作品を完成させました。「家族で参加できて楽しかった」と話す参加者も多く、大変好評のうちにワークショップを終了しました。



上原美術館では、子供向けから大人向けまで様々なワークショップを不定期に開催しています。

博物館実習 8月15日～8月19日

今年度も学芸員資格の取得を目指す学生を対象にした博物館実習を開催しました。今年は静岡県立文化芸術大学、文星芸術大学の学生計7名を受け入れ、5日間の実習を行いました。

初日は当館で開催中の展覧会の見学や、リニューアル工事をした時の様子などをお話しし、2日目は仏教館のバックヤード見学と仏像、卷子、掛軸の取り扱いを行いました。実習生は鎌倉時代に造られた仏像を取り扱いましたが、「木の質感が感じられた」「思ったよりも軽かった」などの感想がありました。掛軸は江戸時代から近現代までの作品を扱い、即興でそれぞれの見どころを発表しました。3日目は近代館のバックヤード見学と、作品のコンディションチェックを行いました。続いて額作品の取り扱い方を行い、間近で見る作品に歓声が上がっていました。4日目は美術館の近くにある太極寺へ伺い、寺院に伝わる文化財を見学させていただきました。また美術館が行っている文化財保護や、教育普及活動、広報について学芸員が講義をしました。5日目は2グループに分かれて企画展立案、展示を行いました。会場とした会議室にパネルを立てて小さな部屋を2つ作り、当館の所蔵品から実際に作品をかけて展覧会を作り上げました。最後に各グループで展覧会のタイトルとコンセプトを発表、お互いに展示内容について質問しあい、盛り上がり今年の実習は終了しました。



職場体験

静岡県立松崎高校 7月25日～7月27日

静岡県立伊東高校城ヶ崎分校 8月4日～8月5日

今年度は2校の職場体験受け入れを行いました。松崎高校は1年生1名、伊東高校城ヶ崎分校は2年生3名で、いずれも学芸員の仕事の一部を主に体験しました。

まず、開催中の展覧会を学芸員が解説しながら見学し、美術館の建物やお客様に見える部分の工夫、バックヤードで空調管理をしている場所や作品を保管する収蔵庫なども紹介しました。また学芸員が収蔵庫からいくつか作品を出して、目の前で作品を見て、実際に触れる体験も行いました。松崎高校の生徒には3日間のうち、調査で使う道具の作成や実技講座準備のお手伝いもしていただきました。

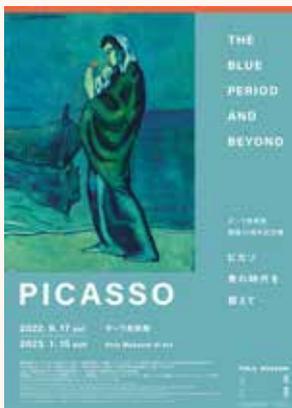




昨年のイチョウの様子

今夏の下田は、海水浴のお客様で賑わいが感じられました。美術館は高校生の職場体験に始まり、学芸員資格取得を目指す学生さんたちの博物館実習などのお客様で、にぎやかな夏を過ごしました。学生の皆さんには今夏の体験が将来、美術や美術館に親しみを感ずるきっかけとなっただけいただければと思います。

さて今号が出る頃には美術館の庭にトンボが飛び交い、秋の気配がただよび始めているでしょうか。美術館そばの日枝神社に植えられているイチョウも、これからだんだんと葉が黄色く色づき、静かな境内に落ち葉の黄色いじゅうたんが広がります。特別展にお越しの際は、美術館周辺の秋の景色を楽しみながらの散策もおすすめです。(櫻井)



ポーラ美術館開館20周年記念展 ピカソ—青の時代を超えて

2022年9月17日(土)～2023年1月15日(日) ポーラ美術館・箱根

箱根のポーラ美術館で大規模なピカソ展が開催されます。ピカソの初期「青の時代」を起点にその画業を国内外の名作約70点から紹介する展覧会です。当館からはピカソ最初期を代表する油彩画《科学と慈愛》を出品します。本展では最新の科学調査から、ピカソがまだ貧しかった「青の時代」、カンヴァスを再利用(リユース)しながら制作していたそのプロセスを紹介しています。深い精神性を湛える「青の時代」を再考することで、キュビズムから古典回帰、円熟期から晩年へと展開するピカソ芸術の本質が改めて浮かび上がります。9月17日から9月30日までは「青の時代」のピカソと同年代の24歳以下の方は無料招待になるそうです。複雑で豊かなピカソ芸術の本質を多面的に味わうことができる、この秋、注目の展覧会です。(土森)



運慶800年遠忌記念特別展 運慶 鎌倉幕府と三浦一族

2022年10月7日(金)～11月27日(日) 神奈川県立金沢文庫

運慶は、日本史上最も著名な仏師であり、新時代を切り開いた卓越した造形力から、鎌倉彫刻の父と称されます。運慶没後八百年に当たる今年、これを記念する展覧会が横浜市の神奈川県立金沢文庫で開催されます。この記念すべき展覧会に、当館に寄託されている、松崎町吉田寺の阿弥陀三尊像と毘沙門天像が出展されます。これらの仏像が伊豆を出るのは、2000年、本像の寄託先が東京国立博物館から当館に変更になって以来22年ぶりのこと。運慶はじめ慶派仏師の名像の数々とあわせ、是非ご覧ください。(田島)

次回休館日は2023年1月10日(火)～1月20日(金)です(展示替えのため)